

「聞く」活動に焦点を当てた道徳授業

－児童が多面的・多角的に考える道徳授業を実現するために－

林田 清美（長崎大学教育学研究科教職実践専攻）

山岸 賢一郎（長崎大学教育学研究科）

1. はじめに

著者の問題関心は、「聞く」活動を通して学習する道徳授業にある。つまり、児童の学習により役立つ「聞く」活動を、道徳授業に取り入れていくことにある。そのために、本実践研究において、「聞く」活動を取り入れた道徳授業を構想し、実践を試みることにした。本実践研究において目指す児童の姿は、友達の話「聞く」ことで考えを広げ、自らの価値の捉えを再構成する、というものである。友達が考えたことを聞かなければ、多様な考えを知ることはできないのであり、今の自分や友達の価値の捉えを交流させることで、これまでになく考えに出会うことができると思う。

本実践研究の背景には、平成30年度から全面実施となる「特別の教科 道徳」がある。とりわけ、「道徳的諸価値についての理解を基に、自己を見つめ、物事を多面的・多角的に考え」る学習が求められていることに注目したい。「多面的・多角的に考え」とは、一面的な考察を行わないことを意味する。中央教育審議会が指摘するように、これまで道徳授業では、資料の登場人物の気持ちを読み取ることが中心の活動であり、児童は分かりきっていることを言うことが多かった。これからは、今の自分の価値理解を基にしてそれを友達と交流させることで、新しい考えに出会い、道徳的諸価値について様々な角度から考察することが必要になる。つまり、今の自分がもつ考えと友達の考えを交流させることで、価値の再構成をするわけである。そのためには、まず道徳授業の中で、友達の考えを知る必要がある。そして、友達の考えから新たに発見した考え方を検討の素材にし、これまでの自分の考えを再構成する。ここでの「検討」とは、見直すことや振り返ること、という意味である。友達が考えたことを聞かなければ、多様な考えを知ることはできない。学習指導要領に示されている道徳的諸価値について、様々な角度から考察するためには、友達の話「聞く」を通して多様な考えがあることを知る必要がある。

本実践研究は、以上の背景を踏まえて、友達の考えを「聞く」ことで自らの価値の捉えを再構成する児童の姿を目指す。「聞く」目的は、友達の考えを知って、自分の価値の捉えを多面的・多角的なものにすることにある。自分の考えを再構成するために友達の考えを検討の素材として集める、という位置づけで「聞く」活動を取り入れた道徳授業を試みた。

ここで、本実践研究が注目する「聞く」ことについて説明しておきたい。本実

実践研究が注目する「聞く」活動とは、端的に述べれば、自らの考えを検討するための素材として、友達の言葉を自らに入力する作業である。その友達の言葉が、聞き手の価値の捉えの再構成を促すと考えるからだ。

そのため、本実践研究では「学習者＝聞き手」と捉える。授業実践の考察においては、友達の考えを聞くことが聞く側の学習にとってどのような価値があるか、という視点をもって行う。本実践研究の道徳授業では、他者の考えは自分の価値の捉えを再構成する素材となる。たくさんの友達の意見を聞けば、その中には、自分のものとは全く異なる価値の捉え方もあろう。道徳授業では、一人一人の価値の捉えを聞かなければ、多面的・多角的な考えを知ることはできない。児童が多様な価値の捉えに出会い、それらを検討しながら再び価値を構成していくという意味で、「聞く」活動は児童の学習に貢献できるものと期待する。

ただし次のことには注意しておきたい。聞き手である学習者が、最終的に再構成された価値の捉えの中に、友達から聞いたことをすべて（あるいは、教師の求めるもののみ）を採用することを求めているのではない。また、友達の考えをすべて肯定させようとしているのでもない。学習者が聞いた考えは、あくまで検討のための素材であり、それを経て新たな価値の捉えを自分なりに構成してほしいのである。

2. 授業の計画と実際

本報告では、X小学校5・6年複式学級でH28年11月に実施した「黄熱病とたたかい」(2-(5)感謝)の道徳授業について報告する。道徳授業としては、「自分は家族や友達、地域の人々などに支えられたり助けられたりして生活していることに気づき、感謝の気持ちを持ち、周りの人々の支えに応えて、自分も周りの人々を支えたり助けたりすることの良さを感じとる。」というねらいを立てた。しかし、実践研究としては、このねらいを達成するためのひとつの手立てとして、前述したような「聞く」ことにかかわる活動に注目している。

ここで、「聞く」活動を取り入れた授業全体の構成について、授業の実際を踏まえながら説明したい。本授業は、主に、4つのパート、①本時の学習課題をつかむ、②資料についての理解、③「聞く」活動をし、価値に迫って考える、④学習のまとめ、から構成される。

「①本時の学習課題をつかむ」のパートでは、自分の生活を支えてくれている人を思い浮かべて、「いつも、ありがとうの言葉で表している感謝の気持ちを、行動で表すことはできないか」と問い、本授業実践の学習課題をつかませた。

「②資料についての理解」のパートでは、資料が長くなるため、2回に分けて読み聞かせた。前半部分は、野口英世が自分の人生を支えてくれた人々を思い出して目頭を熱くする場面である。ここで、野口英世には支えてくれる多くの人がいることを児童に印象付け、野口英世に感謝の気持ちがあることを感じさせた。資料の後半部分では、野口英世が病気であったにもかかわらず、アメリカやアフ

リカに渡って研究を続け、最後は自身も黄熱病に感染して亡くなることが描かれている。ここでは、野口英世が黄熱病の研究に懸命に取り組んでいたことを中心に理解させた。

「③「聞く」活動をし、価値に迫って考える」のパートは、「聞く」活動を位置づけた本授業実践の中心となる部分である。本授業実践が構想した中心発問は、

(中心発問) なぜ、英世はこんなに研究を頑張っていたのだろうか。

である。この問いに対する自分の考えをワークシート(図1)に記入させた。「聞く」活動では、近くの人と向かい合って互いの考えを聞かせた。そのうえで、みんなで考えを共有するために発表の時間をとった。今回は全員が挙手し発表した。似ている意見はまとめたり傍線で補ったりしたため、板書したの

道徳ワークシート	名前 ()
①	
②	

図1 授業で使用したワークシート

は「黄熱病になった人を助けたい」、「恩返しをしたい(できないとダメ)」、「支えてもらったから次は自分の番」、「感謝(ありがとう)の気持ちを伝えたい」、「自分の使命(役割)を果たしたい」、「期待に応えたい」、「支えてくれた人のために頑張りたい」の7つだった。授業者が「これらに共通するものは何か」と問うと、「感謝の気持ち」という意見が挙がった。そこで、「出し合った考えのどんなところが感謝のきもちになっているのか」を問い、友達と話し合いながら出し合った考えをさらに検討させた。その結果、「恩返し」という考えに感謝の気持ちがこもっているとする意見が多く挙げられた。しかし、1つのグループは「すべての意見に感謝の気持ちが隠れているのではないか」と指摘しており、野口英世の行動の裏には感謝の気持ちがあるということが全員に共有された。これを踏まえて、「なぜ自分が頑張ることは感謝の気持ちを示すことに繋がるのか」を問い、「支えてくれた人は頑張してほしいと思っていたから、頑張ることで恩返しができる」、「ありがとうの言葉だけでは伝えきれないから、頑張ることで長年の感謝を伝えることができる」という考えが挙げられた。

「④ 学習のまとめ」のパートでは、友達から聞いたことを踏まえて考えたことをワークシートに記入させた。つまり、ここでの記述は、児童が授業前に持っていた価値の捉えと友達の価値の捉えを踏まえて再構成した考え方が表れる。

以上の授業内容をまとめたものが表1である。

表1 本時の展開「黄熱病とのたたかい」

過程	学習活動	発問と予測する児童の反応	指導上の留意点
導入	① 本時の学習課題をつかむ	<p>○「<u>ありがとう</u>」と言うとき、<u>どんな気持ちで言いますか</u></p> <ul style="list-style-type: none"> ・ありがとう ・助かったな ・ありがたいな <p>○<u>ありがとうの言葉以外で、その気持ちを示す方法はあるか</u></p> <ul style="list-style-type: none"> ・何かしてもらった分、自分も人に何かしてあげる 	<p>○感謝の気持ちについてみんなで共有し、本時の学習課題に繋げる。</p> <p>○本時のねらいに繋がるようにするため、「ありがとう」の言葉の他に、感謝の気持ちを表現する方法がないかを考える。</p> <p>児童から出てこなければ、具体例を示し、考えを広げられるようにする。</p>
	学習課題：感謝の気持ちを表すのは、「ありがとう」の言葉だけか		
展開	<p>資料を読む1</p> <p>② 英世のもつ感謝の気持ちを予想する</p>	<p>○読み聞かせ（前半）</p> <p>○<u>英世は、どのような人々に支えられてきましたか</u></p> <ul style="list-style-type: none"> ・お母さん ・小林先生 ・渡辺先生 ・血脇先生 ・フレキシナー博士 ・友人たち <p>○<u>英世は、周りの人々に支えてもらって、どんな気持ちになったろう</u></p> <ul style="list-style-type: none"> ・うれしい ・ありがたい ・助かったな ・自分を支えてくれる人が、たくさんいるんだな <p>→「<u>ありがとう</u>」の嬉しい気持ち</p>	<p>○英世が支えてくれる人々を思い出して、目頭を熱くする場面までを読む。</p> <p>○自分を支えてくれる人がいるように、英世にも支えてくれる人がいたことを確認し、英世の感謝の思いを想像できるようにする。</p> <p>○今の自分の価値観で英世の気持ちを考えることで、ありがたいと思う気持ちに共感できるようにする。</p>

<p>資料を読む2</p> <p>③ 人々の期待に応えようとする英世の思いに気づく</p>	<p>○読み聞かせ（後半）</p> <p>○<u>なぜ、英世はこんなに研究を頑張っていたのだろう。</u></p> <ul style="list-style-type: none"> ・いろいろな人に支えてもらっていたから ・応援してくれる人がいたから、しっかり頑張れた ・自分ひとりでできなかったことも、周りの人と一緒にできた ・黄熱病の研究がしたかったから ・人々の命を救いたかったから <p>→ 支えてくれる人がいたから頑張っていた</p> <p>○<u>なぜ、頑張ることが感謝の気持ちを表すことになるのだろう。</u></p> <ul style="list-style-type: none"> ・せっかく支えてもらったから、頑張らなきゃいけない ・「ありがとう」を言うのもいいけど、頑張らなかつたら意味がない ・頑張っほしくて支えてくれているからだと思う ・頑張っている姿を見せたら、喜んでくれると思った <p>→ 自分が頑張ることは、支えてくれる人に恩返しをすることに繋がっていく</p>	<p>○英世が人々の期待に応えたいと思って研究に打ち込む場面を読む。</p> <p>○英世が研究に打ち込んだ理由を考え、ワークシートに記入する。</p> <p>この発問によって、人々の支えで頑張ることができていることに気づかせる。また、人々の思いに応えようとする英世の気持ちに気づけるようにする。</p> <p>○児童が英世の気持ちを想像しづらい場合は、友達と相談しながら考える時間をとる。</p> <p>○人々の支えに対する感謝の気持ちを、自分が頑張ることで示そうとする英世の姿から、その意義について考える。</p> <p>○より多様な考えを聞き合うことができるようにするために、2～3人のグループを作って相談しながら考える時間をつくる（3分程度）→全体での共有</p>
<p>④ 本時で考え</p>	<p>○<u>教師の説話を聞く</u></p>	<p>○説話を話すことで、資料</p>

終末	たことをまとめる。	<p>小学校の先生になるために、支えてくれた人たちがいて、その思いに応えるために感謝の思いをもって頑張ろうという気持ちでいること。</p> <p>○本時の学びを記入する。</p>	<p>から学んだことと自分自身のことを結び付けて考えることができるようにする。</p> <p>○教師が、感謝の気持ちを頑張りで示すことを良いことだと感じていると伝えて、児童にも、その良さを感じ取ってもらう。</p>
----	-----------	-------------------------------------------------------------------------------------------	-------------------------------------------------------------------------------------------------------------

3. 考察と改善

以上に、「聞く」活動を取り入れた道徳授業の構成について、授業の実際に触れながら紹介してきた。ここでは、より善い学習指導ができるよう改善策を提案するために、紹介してきた道徳授業について批判的に考察したい。なお、考察はビデオ映像に基づいた授業者自身の振り返りと児童が残したワークシートの記述をもとにしている。今回の道徳授業は、「聞く」活動を通して、自分を支えてくれる人に行動で感謝を示すことの良さを感じ取り、実践したいという気持ちにするために行った。このねらいと学習活動を踏まえて、押さえておきたい成果と課題を述べ、次いで改善策を述べる。

(1) 成果と課題

成果と考えることを2点述べる。第一に、導入場面における焦点化（学習課題の把握）がそのまま「聞く」視点を与えることにつながる、ということである。導入では学習課題を方向づけることがねらいであった。授業者が「給食を残さず食べることは、感謝の気持ちを表していることにならないか」と問うた時、児童が「ああ！」という反応をした。このことから、本授業実践のめあて「感謝の気持ちを表すのは、ありがたいの言葉だけだろうか」を、児童が学習課題として明確につかむことができたのがわかる。そのため、資料を読んだ後も、感謝を行動で示す野口英世の姿について、全員が理解することができたのだろう。ワークシートの記述を見ても、最後に書かせた感想では14人のうち13人が「感謝の気持ちを行動で表すことができる」と記述しており、導入場面で行った学習課題に対する答えを、道徳授業のねらいに沿って導くことができたのがわかる。以上の理由から、導入場面での焦点化は、本授業実践にとって大きな役割を担うものであったと考える。

第二に、児童が発表した考えに対して授業者が丁寧に問い返すことは、児童の「もっと聞きたい」という意欲を促すということである。この道徳授業で互いに聞かせたかったのは、野口英世の行動の裏にある思いが何かである。全員が発表

してから教師が児童に問い返ししながらみんなで互いの考えを聞いたときは、「自分の使命（役割）を果たしたい」という児童の考えに対して、「使命ってなに？」と詳しく聞こうとする児童の発言があった。この発言によって、質問された児童は自分の考えをより詳しく語った。そのため、質問した児童も他の児童も、その発表に裏付けられた理由や思いに気づくことができた。そうなれば、価値の検討もさらに深いものになるだろう。授業者が心掛けていたのは、児童の発表を表面的に受けとめるのではなく、言葉の意味や解釈を確認したり具体例などを詳しく説明させたりすることである。このように授業者が児童の考えを詳しく聞こうとする中で、児童も友達の考えを詳しく聞こうとする雰囲気生まれたと言えるかもしれない。全体発表で全員が挙手したのは、この雰囲気があったからだろう。授業者は全員の考えを板書して、「どうして英世の行動が感謝の気持ちを表していると思うのか」、「支えてくれた人々の期待はどんなものか」等、一つ一つに感謝という視点から問い返しをすることができた。この手立ては、微力ながら児童が互いの考えを丁寧に聞いて学ぶことに貢献するものであった。

授業後の感想からは、たとえば、児童Dは中心発問に対して「母や〔英世の恩師である〕小林先生、数多くの友人たちの期待に応えるため。」と記述した。児童Dの授業後の感想には、「今の道徳の時間を通して、『ありがとう』よりもっともっと良い伝え方が出来るし、支えてくれた人の気持ちを考えると、『自分って幸せだな』と思った。」とある。他の児童の記述と比較して「支えてくれた人の気持ちを考えると」とあるのが特徴である。授業内で、児童Kに対して「使命って何？」という疑問を語ったことや、「周囲の期待」について友達に詳しく聞いたことが、この考えに繋がっていると推測される。また、児童Hは中心発問に対して「次は自分が『恩返しをしなきゃ』という気持ち」と記述したが、授業後の感想には「私だったら、元気で登校をすること、元気なあいさつの毎日つみかさねていけます。」と自分の生活に置き換えて具体的な行動を提案した。これは、児童Dのいるグループが、「私たちだったら・・・」と同様のことを発表したため、それを聞いたことから生まれた意見であると推測できる。児童Hと同様に自分の行動について具体的に述べたのは児童Jも同様であった。さらに、児童F、児童K、児童Lは、中心発問に対して「恩返しをしたいから」、「期待に応えたいから」と多くの児童と同様に記述していたが、授業後の感想には「感謝の気持ちを行動で表すことができる」と述べており、本時でねらった価値を理解できていることがわかる。

次に、授業実践の課題として、発表して聞き合ったことをもとに、さらに価値を深めていくことができなかつたことを指摘したい。全員が意見を発表した後に、授業者は「共通点はないか」と問うた。それに対して児童は、どの意見も感謝の気持ちを指摘していると答えた。それを受けて先程振り返ったような問い返しをしながら、互いの考えを詳しく「聞く」ことで野口英世の行動を裏付けるのは、感謝の気持ちだと気づかせた。次いで「なぜ、自分が頑張ることが感謝の気持ちを表すことになるのか」を問い、児童にはもう一度友達同士でグループになって話し合うよう指示した。しかし、児童の意見は中心発問に対する答えと類似して

おり、この問いはすでに出した問いの繰り返しであったと考える。つまり、この問いでは、考えたことをさらに深めるということにはならなかった。本来ならば、互いの考えを出し合って検討したことをもとに、自分のこれまでの生活を振り返ったり、具体的にこれから何ができるかを考えたりすることで、友達の考えを聞いたことを生かしたはずである。その結果、多くのグループが「努力する姿を見せることで支えてくれた人は喜ぶから、自分の行動は感謝の気持ちを示すことになる」という意見を発表した。しかし、1つのグループからは、「私たちだったら、小大会に向けて校長先生にたくさん指導してもらったから、しっかり結果を出すことで感謝の気持ちを表すことになる」と身近な生活場面について意見を発表した。自分たちの力で実生活に結び付けて考えているのは素晴らしいことではある。しかし、授業者がこれを広げて他のグループに問うたりすることができていなかった。そのため、本授業実践のねらい「周りの人々の支えに応じて、自分も周りの人々を支えたり助けたりすることの良さを感じとる。」を達成できたものの、それを具体的な学びに繋げるには及ばなかったと考察する。

以上の考察をまとめると次の3点が成果と課題である。

(成果)

- ①導入場面での方向付けが「聞く」視点を与えることにつながる。
- ②友達の発言の裏にある価値の捉えを詳しく「聞く」ために授業者の問い返しが有効な手立てである。

(課題)

- ③授業で学んだことを身近な生活場面に置き換えるなどして、児童に深く検討させるには手立てが不十分であった。

(2) 改善策

以上を踏まえて、「聞く」活動を取り入れた道徳授業をより善くするために、以上に述べた課題を踏まえて改善策を提案したい。

確認しておくとして、本授業実践で提示した中心発問は、「なぜ、英世はこんなに研究を頑張っていたのだろうか。」である。児童に、これに対する考えをグループで聞き合わせ、発表させることで野口英世の思いをさらに深めていこうとした。授業者が児童の考えを丁寧に問い返しながらか発表させることはできたものの、それより先の深まりは得られなかったと考察する。つまり、友達がどうしてそう考えたのかを互いに聞かせることができたものの、聞いてどう思ったのか、あるいは聞いてみて得られた新しい発見は何かを問うていなかったのだ。たとえば、「頑張ることで感謝の思いを示せるのなら、自分はこうしよう（自分はこんなことをしているな）」という思いに至ることが理想である。

そこで、児童をこのような意識にまで高めるためには、「英世のような行動は、自分たちにできないのだろうか」、「自分を支えてくれる人々には、どんな行動によって感謝の気持ちが伝わるだろう」等と問うことで可能になるかもしれない。本授業実践では、1つのグループが自ら「自分なら…をする。」と提案が挙げられ

たが、それを上手く拾って他の児童にも考えてもらうことはできなかった。そのため、具体的な行動内容をワークシートに記入した児童も一部であった。互いの考えを聞いた後にこのような問いをダイレクトに示すことは、本授業実践にとって必要な手立てであったと考える。

また、これから自分にできることを問わなくても、「普段の自分たちの行動も感謝の気持ちを表していることになるのでは？」と問うことで、これまでの児童の振る舞いを感謝の視点で価値付けてもよいだろう。本時の学習の視点から、できていない自分に気づかせるのではなく、できている自分を発見させるのである。

以上が本授業実践における改善策である。本授業実践は、授業のねらいという観点からすれば、ねらい達成に近づくことができた実践である。しかし、「聞く」活動という観点からすれば、ここで提案した改善策を用いることで、さらなる授業の向上を目指す必要がある。

4. おわりに

本報告では、「聞く」活動を取り入れた道徳授業の実践について紹介し、その批判的検討に基づいて改善策を提案してきた。実践した道徳授業を振り返ると、児童の「聞く」活動にとって必要な手立ては、道徳授業に限らず、他の教科・領域にも共通するものであると考える。導入で児童に学習課題を明確につかませたり、なぜそう考えたのかを詳しく聞き合ったりする、というような指導のあり方を見出すことができた。また、道徳授業に「聞く」活動という主題を当てはめることで、授業全体の設計から児童との些細な語りに至るまで、微力ではあるが考察に至ったことは授業者として価値あるものである。「聞く」活動は児童が一人で答えを出す活動ではない。友達の考えにたくさん触れ、多面的・多角的に考える中で価値の捉えを構成する活動である。これから求められる「考える道徳」とも通ずる。資料を通してだけでなく、互いに表現した考えを検討し合いながら結論を求めるからである。これを道徳の学習として成立させるためには、これまで論じてきたように、授業者の丁寧な支援が不可欠であり、設定する活動や児童にかける言葉の意図を明確にして取り組む必要がある。「聞く」活動を設定することは、児童が自分の中にある価値を飛び出して友達の考えを知ろうとする活動だと考える。これからも、「聞く」活動を通して児童が新たな価値の捉えに出会うことが出来るような、より善い道徳授業を追究していきたい。

参考・引用文献

竹内善一原著（2015）「黄熱病とのたたかい」『私たちの道徳 小学校五・六年』文部科学省

鷺田清一（1999）『「聞く」ことの力』阪急コミュニケーションズ

名越早苗（2005）『道徳的実践力を高め、道徳的実践を促す道徳教育の展開—対話による道徳の時間の指導の工夫を通して—』広島県立教育センター研究報告

中央教育審議会（2014）『道徳に係る教育課程の改善等について（答申）』

道徳教育の充実に関する懇談会（2013）『今後の道徳教育の改善・充実方策について（報告）～新しい時代を、人としてより良く生きる力を育てるために～』
文部科学省（2007）『小学校学習指導要領解説 道徳編』
文部科学省（2015）『小学校学習指導要領解説 特別の教科 道徳編』